

# 「華威先生」の“訪日”

——日中戦争下の文学交流と“非交流”——

弓 削 俊 洋

## 1. 「華威先生」の“訪日”と中国——はじめに

張天翼のユーモア小説「華威先生」<sup>1)</sup>(1938年4月)について、中国の現代文学史はきわめて高い評価を与えている(たとえば「抗戦初期の佳作」<sup>2)</sup>「現代諷刺小説の傑作」<sup>3)</sup>「現代短編小説史上、稀にみる名作」<sup>4)</sup>など)。

しかし、発表当時からこういう評価が確立していたかということ、そうでもない。むしろ、「華威先生」に対しては、かなり否定的な見方も存在していた。というのもこの作品が、以下に示した梗概からも分かるように、日中戦争のさなかに、中国の“暗黒”を描き出したからである。

抗戦初期、前線から離れたある都市でも、多くの抗日団体が作られた。華威先生は、そうした団体の幹部の肩書を幾つも持ち、会議から会議へと渡り歩く“抗日名士”のひとりである。一つの会議に出席できる時間はわずか十分間、それでも華威先生は、会議で演説することだけは欠かさない。なぜなら会議は、“中心的指導者”としての自分の権威を、他人に認めさせるための絶好の機会だからだ。

ところがある日、かれの権威を傷つける事件が起こった。知らない間に、新しい抗日団体が結成されたのだ。激怒した華威先生は、団体の指導者たちを呼びつけ詰問するが、逆に日頃の無責任な態度を批判されてしまう。

その晩かれは、浴びるほど酒を飲んで荒れ狂う。しかし妻がベッドに運んでくれたとき、こう言うのを忘れなかった。「明日十時に集会がある」……。

抗戦初期の作品の多くが、中国人民の英雄的な闘いを讃美するなかであって、「華威先生」は異色の作品だった。華威先生の俗物性を皮肉ることによって、そういう人物が指導者として君臨している抗日陣営の矛盾をついたからである。それゆえに大きな反響をよぶ<sup>5)</sup>のだが、そのなかには批判的な意見も少なくなかった。抗日戦勝利をめざして全国民が一致団結すべきときに、わざわざ中国内部の弱点を暴き立てる必要はないというのである。

さらに1939年2月には、この作品が日本で翻訳された事実が明らかになり、批判に拍車をかけることとなった。その口火を切った論文が、林林<sup>6)</sup>の「『華威先生』の訪日について」<sup>7)</sup>である。林林はこのなかで、翻訳には中国に対する“侮蔑”という意図が隠されており、「華威先生」が反中国宣伝の道具にされたと主張する。

日本の新聞によれば、「華威先生」が日本に渡ったそうだと『改造』十一月号に、日本人のある作家が翻訳したというのである。……訳者には、中国の抗戦文学の優秀な作品を、日本の読者に紹介しようという気持ちはない。逆に、役立たずの幹部が抗戦中国にいるのを見て、敵を軽蔑するという楽しみを読者に与えるために、翻訳したのだ。

……華威先生の出現は、日本人読者の中国人に対する侮蔑の念をいっそう強め、ファシズムを宣伝し、侵略の信念を強固にさせるという役割を果たすはずだ。つまり我々は、「おのれを落としめて、他人の志気を高める」ことになったのである。

こう述べたのち林林は、「神聖な民族解放戦争において、文学創作の主要な任務は、暗黒の暴露ではなく光明への讃美だ」と結論し、“暴露文学”の創作を否定するのである。

もちろん、作品を支持する文章も発表されるのだが、こと翻訳の意図という点では、それらも林林と同じ見方をしていた。「華威先生」擁護の代表的な評論

が、「哀れな日本の文芸家は、主人に媚びを売るために、卑しい鼻で、中国の弱点を暴露した秀作『華威先生』の存在を嗅ぎ出した。彼は、まるで宝物でも手にいれたように得意になり、これこそ最もよい宣伝の機会だと思ひ、日本語に翻訳して雑誌に載せたのである」<sup>8)</sup>とっているのは、その例である。

さらに作者・張天翼の文章にも、「その読者（訳者——引用者）が、好意なんでもっているはずはない。たぶん、中国人が自分の欠点を指摘しているのを見るや、喜び勇んで、こう言いたかったのであろう。ほら見ろ、中国人にはこんな弱みがあるぞ！」<sup>9)</sup>という一節があり、彼もまた林林と同じ認識をもっていたことが知れる。作品への評価は分裂していた抗戦期においても、翻訳の意図については、中国（人）を軽蔑させるためだという認識で一致していたわけである。

しかも、こうした見方は、解放後の現代文学史にも継承された。作品そのものは高く評価するものの、翻訳の意図は中国に対する“諷刺”にあったというのである。

「日寇の新聞が翻訳をし、中国の抗戦を諷刺する材料にした」（中国現代文学史略 1955）<sup>10)</sup>「日寇の新聞によって翻訳され、中国の抗戦を諷刺する材料にされた」（中国現代文学史 1979）<sup>11)</sup>などが、その例である。

さらに 1980 年代の文学史は、“反動的”な“按語”の存在を指摘すると共に、そのような“按語”を付けた『改造』を激しく非難する。

そのうち“按語”に触れるものには、「1938 年 11 月、日本の雑誌『改造』は、下心をもって反動的な“按語”を付け、『華威先生』を訳載した」、<sup>12)</sup>「同年（1938 年）11 月、小説は、日本の雑誌『改造』に訳載され、そのうえ下心のある“按語”が付された」、<sup>13)</sup>「その年（1938 年）の 11 月、日本の雑誌『改造』は、『華威先生』を訳載すると共に、按語の中で中国人民を中傷した」<sup>14)</sup>などがある。

また、『改造』に対しては、「1938 年 11 月、すでに日本帝国主義の代弁者に墜落していた雑誌『改造』は、『華威先生』を訳載すると共に、編集後記の<sup>15)</sup>中で、中国の抗日活動家と中国人民を、あくどく攻撃し中傷した」<sup>16)</sup>というように、「日本帝国主義の代弁者」という非難が浴びせられている。

以上のように、「華威先生」は中国への“侮蔑”という意図のもとに翻訳された、というのが中国での共通認識である。同時に、そうした“下心”は、雑誌『改造』や、“按語”にも見られるというのである。

しかし“侮蔑”や“中傷”という認識で、「華威先生」の“訪日”をとらえることに、私は抵抗を感じる。その理由としてはまず、中国の文献が、訳載誌について正確な記述をしていないという事実をあげたい。

先の引用文も示しているように、中国の文献が訳載誌に触れるときは常に、『改造』の名前をあげる。一部に「新聞」紙上というのも見られるが（中国現代文学史略ほか）、具体的な名前としては『改造』以外にあがってこない。1938年11月発行の『改造』こそが、「華威先生」の訳載誌だ、というのが中国での“定説”である。

ところがその『改造』に、「華威先生」は載っていないのだ。もちろん「新聞」に掲載された形跡もない。「華威先生」を訳載したのは、実は改造社の雑誌『文芸』であり、<sup>7)</sup>しかも発行月は1938年11月ではなく、12月だった。

この事実から判断すれば、中国の論者たちは訳載誌の『文芸』を実際に見ておらず、したがって“按語”や翻訳文も読んでいないと考えられる。つまり中国での批判は、“伝聞”や“請売り”によって行われている可能性が強いのだ。

とすればそのような批判、具体的には、①翻訳は中国を侮蔑するため、②訳載誌は日本帝国主義の代弁者、③“按語”は中国を中傷した反動的なもの、という“定説”についても再検討する必要がある。

## 2. “按語（後記）”について

そこでまず、1980年代の現代文学史から批判を浴びる“按語”（訳文の後に付けられているので、以下「後記」と呼ぶ）から見ておこう。筆者は「華威先生」の翻訳者・増田渉であり、翻訳の意図を知る上でも参考になると考えるからだ。下に掲げたのがその全文であるが、内容は、“抗戦文学”への批判、中国での「華

威先生」擁護論の紹介、「華威先生」への肯定的評価の三つより成っている。

日支事變以來、支那の文學は所謂「抗戰文學」の一色で、彼等がいかにも勇敢に抗戰したかといふやうなことを誇大に、威勢よく、出たために書くことばかりだった。そこへ「華威先生」があらはれて囂々の議論を投じることになった。この「華威先生」といふのが内部的醜惡面を暴露した小説だったからである。事件を勇ましく立派なものとして描くもいいが、それよりももっと眞實なる憎惡を以って彼等の社會に内在する醜惡を暴露すべきだ、「言葉」だけの勇ましい立派なことよりも、もっと現實を直視せよ、文藝は永遠に批判的なものだ——といふのが彼等一派の主張である。何れにせよ、張天翼が敗戦支那における内部的醜惡をかくも大膽に描寫したといふそのことは、眞面目な勇氣があるといつていゝであらう、この作品の藝術としての優劣はともかくとして。(譯者記)<sup>18)</sup>

周知のように増田渉(1903～77)は、上海遊学中の1931年に魯迅と知り合い、魯迅宅で直接作品の講釈を受け、帰国後は、「魯迅伝」(改造14-4 1932. 4)や『魯迅選集』(佐藤春夫との共訳 岩波文庫1935. 6)など、魯迅の紹介者として優れた業績を残した人物である。同時に、古典偏重のアカデミズムに反発して、「中国現代文學ノ研究ト日支兩國文化ノ交驩」<sup>19)</sup>を目的として結成された「中国文學研究会」(1934年10月成立)の会員として活躍したことで知られている。

この増田を丸山昇は「地味な勉強好きの青年」と評し、彼の「魯迅伝」について「その偏見のない心で、魯迅から数々のものを吸収し、魯迅の自分の知らなかった側面にも眼を開かれていったあとがうかがわれる文章である」と書いている<sup>20)</sup>さらに竹内好もまた、増田の魯迅研究を例に引きながら、中国文學研究会の仕事は「かくべつ世間に目立たぬ地味な、それだけ今となっては、蕪雜な支那物の流行のさ中であって、やゝ清潔味の伴ふもの」で、「支那文學(研究)の態度にある目標を與へた」と述べている<sup>21)</sup>

しかしこうした経歴などから浮かび上がる増田渉のイメージは、〈後記〉とうまく結びつかない。特に、「誇大に、威勢よく、出たために書くことばかりだった」という「抗戦文学」への評価には、相手を見下したような調子があり、好意的な批評とは思えない。また、「敗戦支那における内部的醜悪」というのも気にかかる表現だ。

現代文学史は、〈後記〉のどこが“反動的”であるのかを示していない。だが、このような記述が中国人の目に触れるならば、彼らの反発を招くことは予想できる。現代文学史での批判は別にしても、のちに問題となる可能性を〈後記〉がはらんでいたことは否定できないように思う。

もっとも、これは印象にすぎず、増田の真意とかけ離れている可能性もある。それを明確にするためには、さらに残るふたつの問題について検討することが必要だ。

### 3. 改造社版『文芸』と中国現代文学

#### ① 高杉一郎の証言

「華威先生」を掲載した『文芸』は、1933年（昭和8年）11月に、改造社から創刊された<sup>22)</sup>多彩な執筆者と幅広い編集方針とで人気を集め、昭和10年代には『新潮』と並んで「最も権威ある文芸雑誌」<sup>23)</sup>と見られるようになった。

ところでこの雑誌は、中国現代文学を積極的に紹介したことで知られている。たとえば『現代日本文芸総覧（下）』の解説には、「とくに『文芸』は早くから中国現代文学の紹介に熱意を示し、「きわめて意欲的な編集ぶりを示した」とある<sup>24)</sup>

この点について高杉一郎（第三代編集長）は、『文芸』が「日ごとに強化されてゆく軍国主義的な文化統制に抵抗する姿勢をあくまでも崩さず、中国現代文学の紹介はそうした姿勢の“あらわれ”だったと述べている<sup>25)</sup>さらに別の文章のなかでは、“抵抗意識”という言葉を用いて、『文芸』と中国現代文学との関係を具体的に説明している。少し長くなるがその部分を引用する。

やはり、最小限の抵抗意識はいつでも心の底にあった。

……昭和十一年（1936年）の二・二六事件以後、私たちはこの抵抗意識をすこしずつはつきりさせていった。……農民文学や大陸開拓文学、朝鮮文学や満州文学など、戦時体制の日本の要請のなかから生まれてきた文学にスペースを拒まなかったと同時に、日本のそのような動きに脅威を感じていたお隣の中国のあたらしい文学の紹介も怠らなかった。こうして、魯迅、蕭軍、蕭紅などの文学が『文芸』で紹介されたし、そのころ市川で晴耕雨読の生活を送っていた郭沫若が直接に日本語で書いた文章も発表された。昭和十二年（1937年）の七月に、いわゆる「シナ事変」がはじめられたときには、私たちの雑誌はちょうど、その同じ精神のなかで計画された日中作家のあいだの書簡往復を発表しはじめたばかりであった。最初に、七月号で蕭軍と中野重治が、つづいて九月号で夏衍と久板栄二郎が、手紙のやりとりをした。さらにひきつづいて、丁玲と中条百合子の往復書簡が用意されてあったが、これはとうとう発表することができなかった。しかしその後もなお、私たちは胡風の評論、張天翼や老舍の作品を紹介したばかりでなく、その年のおわりの号には竹内好や松枝茂夫の中国文学研究会に依頼して、日本ではじめてと思われる「現代支那文学辞典」の編集をしてもらったりした。

……日本が中国に侵略戦争をおこなっていたかぎり、私たちは惰性的で無気力なものであったにせよ、抵抗意識をもちつづけたのであった。<sup>26)</sup>

このように高杉は、日本の戦時体制に対する“抵抗意識”を『文芸』編集部がもっており、中国現代文学の紹介はその証だったと主張している。さらに『シナ事変』後も最小限の“抵抗意識”は失わず、張天翼の作品<sup>27)</sup>すなわち「華威先生」の紹介もこの意識に基づいて行われたというのである。

これが事実だとすれば、「華威先生」の掲載は日中戦争への“抵抗意識”<sup>28)</sup>の“あらわれ”であり、そのとき「すでに日本帝国主義の代弁者に墮落していた」などという見方は成立しない。

## ② 「華威先生」掲載前後の『文芸』

高杉一郎は、中国での見方と真っ向から対立する証言を残しているが、その信憑性は当時の誌面によって検証されなければならない。「シナ事変」(1937年7月7日)以後の『文芸』から、中国現代文学に関するものを幾つか拾い上げてみよう。

まず「シナ事変」直前(7月1日)に始められた日中両国作家の往復書簡について、編集部は、「日本と中国との藝術上の提携の第一歩として今月から兩國作家間の文藝通信を開始した。……本誌の策したこの交驛は兩國間に紛糾する三角波を越えて次々に花開いて行くであろう。そして結ばれた親愛がやがて東洋の平和と文化の上に結實することを確信する」といい<sup>29)</sup>この企画が、日中の文化的交流、友好をめざすものだと言明する。

こうした意図のもとに発表された四人の手紙<sup>30)</sup>は、たしかに「友情と親愛に満ちた」<sup>31)</sup>ものだった。たとえば、夏衍の書簡(7月21日付)には、「親愛なる久板兄 どうか私にかう呼ばせて下さい。……決してあなたと第一回の通信だといふ御世辭からではなく、私は衷心からあなたの藝術と人生とに對する誠實に感動し、又あなたの藝術に對して不斷に精進してゐる熱意に欽佩してゐます」とある。これに対して久板は、8月3日付返書において、「(『事変』のために)あなた方と私たちとの間には、今は何百海里と云ふ地理上の距離ばかりでなく、もつと大きな墻壁が築かれましたが、「かう云ふ公開の場面で、深い理解と親愛に満ちた鞭韃の手を差しのべられたことに對し、限りない喜びを感じます」と書くのだった。

この企画は二回目の「通信」で頓挫するが、その精神は同年12月の中国文学研究会編『現代支那文學事典』の刊行に繼承された。5巻12号の別冊として刊行されたこの事典は、全143項目、24頁に及ぶ本格的な事典であり、その内容も、張天翼を「文筆は柔軟にして流露し」「才氣は内部的に沈潜し、一流の作家となった」と褒めるように、全体として同時代の中国文学に対する好意的な紹介よりなっていた。

翌1938年1月には、周作人の「北京に踏みとどまる——『宇宙風』の編集者陶亢徳に宛てた書信五通」が掲載された。そのなかには、日本占領下の北京に「踏みとどまる」周作人が、「北に留つてゐる人々を李陵と見ないで貰ひたい」という表現によって、祖国の裏切り者にはならないという決意を披瀝した有名な書簡（1937年9月26日付）も入っていた。

同年2月の「“大なる時代”と作家」（老舍作）は、「國を救ふことは我々の天職であり、文藝は我々の技術だ、この二者は必ず一致すべきである。救國の工作がすなわち救國の文章を生む、友人等よ、何でも工作せよ！國を愛して人後に落ちるな、而る後にこそ語れ」と、激烈な調子で救國を訴える抗日文書である。

さらに1939年1月号のプラビア「活動せる國際作家」の欄には、「茅盾（支那）一八九六年生。支那の新文學運動の初期より活動し、しかも今なほ文壇の現役として第一線にある……現代支那文壇に於ける指導的な重鎮。……極く最近までは廣東で『文藝陣地』を編輯して、“人”を描け、いつも問題の核心をなすものは“人”であると主張してゐた」という解説付きで、茅盾の写真が掲載されている。

同年5月には、増田渉の訳によって魯迅「最後の日記」が掲載された。この二年後に増田は、「魯迅のこと」<sup>32)</sup>と題する文章を発表しているが、そのなかで彼は、

その人間からしみ出てくる高いものは、いままで私が接した如何なる人よりも立派な人であったといふ印象は、今なほ國境を超えて、私の中にはつきり焼きつけられてゐるのである。どんなことでも云へる、そしてそれを心から聞いてもらへるやうな、不思議な信賴の魅力ある器量を彼はもってゐた。私は彼の訃をきいたとき、全身で凭りかかつてゐる巨きな支へ棒が倒れたやうな氣がした。

と、魯迅の存在が自分にとっていかに大きなものだったかを告白している。「最後の日記」の翻訳には、このような熱い思いが込められていたに違いない。

このほか、蕭紅や蕭軍の小説、林語堂の随筆、魯迅未亡人・許広平の随筆など、「華威先生」前後（1937. 7～39. 5）に掲載された中国人作家の文章は、合計12篇にのぼる<sup>33)</sup> 日中戦争の時代に、“敵国”の作家たちの文章をこれだけ載せることは、それ自体がひとつの立場の表明を意味する。しかもその中には、老舎のようにあからさまに抗日を主張する文章も見られた。

また、「現代支那文學事典」や〈茅盾解説〉から、同時代の中国文学に対する“友情と親愛”の情を読み取ることができよう。こうした例が示すように、中国の作家や文学界の動向を正確に、しかも好意的な態度で紹介する日本人の文章も、『文芸』には発表されていた。

このように見てくると、当時の『文芸』を支えていたものに、高杉のいう“抵抗意識”があったことは否定できないだろう。もちろん手放しに評価するわけではないが、少なくとも「日本帝国主義の代弁者に墮落していた」という認識だけでは、この時期の『文芸』をとらえることはできまい。

#### 4. 増田渉と「華威先生」

増田渉は「思い出すこと」<sup>34)</sup>（1977年）のなかで、改造社に勤務したことがあり、その間雑誌『改造』などの編集を手伝ったと回想している。「増田渉教授略歴」<sup>35)</sup>（1968年）によれば、改造社在籍は1937年2月から39年3月までの二年間だから、「華威先生」が『文芸』に掲載されたとき、増田は同じ出版社の編集者だったわけである。

したがって、『文芸』の編集姿勢についても一定の認識はあっただろうし、それと全く無関係に「華威先生」の翻訳を行ったとは思えない。増田の翻訳の意図が反中国宣伝にあったとは想像しがたい。

それでは、増田はなぜ「華威先生」を翻訳したのだろうか。それについて最初に指摘したいのは、「華威先生」の作者・張天翼に対する好意的な評価ということである。

増田が張天翼という作家に関心をいだくのは、『世界ユーモア全集 第12巻

支那篇』<sup>36)</sup>の翻訳をしたときからだと思われる。1933年出版の『支那篇』は、佐藤春夫訳と明記されているものの、実際は該書の〈あとがき〉<sup>37)</sup>で佐藤もいうように、翻訳・編集の全てを増田ひとりでやったものだ。

この仕事を始めるにあたって増田は、魯迅に手紙を出し、収録作品に関する助言を求めた。それに対し魯迅は、「今日、内山書店に頼んで小説八種送り致しました。郁達夫張天翼両君のものは私が特に入れたのです。近代の作で私のもの丈なら何んだかさびしい感じがします。若しこの二冊の中で何か取る可きものがあつたら少し訳して……いかゞですか」という返事をよこした(1932年5月22日付)<sup>38)</sup>

このとき同封された張天翼の著作は、短編小説集『小彼得』(上海春光書店1931年12月)であり、「作者は最近に出て来たもので滑稽な作風があると云はれて居る。例えば『皮带』、『稀鬆(可笑しい)の戀愛故事』が如し」いう魯迅のコメントも付されていた。結局『支那篇』には、魯迅の推奨した二篇の作品が収録されるのだが、翻訳の過程で増田はさらに二回、魯迅からの助言を得ている<sup>39)</sup>

同時に増田は張天翼にも手紙を出し、訳についての問い合わせをした。これに対し張天翼は返書<sup>40)</sup>(1932年7月29日付)を送り、増田の質問に答えている。手紙そのものは短かく、事務的な内容だったが、二人の間で手紙のやり取りがあったことは注目される。

おそらくこのような関係も影響しているのだろう、増田の張天翼に対する評価はかなりのものであり、「雑言」<sup>41)</sup>(1935年)という文章では、次のように書いている。

張天翼は既に中堅といふべきだらうが、彼はいま流行兒の觀がある。彼の小説はだんだん上手になるやうだ、そのおしやべりと氣取りもあまり鼻につかぬ程度に、うまくこなされ、却てそれが特長ともなつてゐる。悪ずれと云へばそんなやうにも言へないことはないだらうが、何を書いてもちやんと彼らしい流露感がくまなく行きわたつてゐる、素質のある作家と云へよう。他

に某々と相当名の知れた人々のものを読んでみたが、まあいづれも試作程度のもものが多く、それらに比べると張天翼のものはさすがに手に入ったものとの感を深くする。

この直後に「だが彼は少し才氣を使ひすぎる（或は書きとばすからかも知れない）、だから器用すぎて、作品が薄手に見える遺憾がある」と注文をつけているものの、張天翼に対する増田の評価はきわめて高い。

武田泰淳（中国文学研究会会員）が、「多作無類の張天翼は本年も愚作をもって振っている」「作家としては私が注目しはじめてから一步も進歩はできなかった」<sup>42)</sup>などと酷評しているのを見れば、張天翼という作家を、増田がいかに高く買っていたかが分かるだろう。「華威先生」がこの張天翼の作品であり、しかも当時の話題作でもあったこと、これが翻訳のひとつの理由だったと考えられる。

次に、増田の文学観と「華威先生」との関係という点から、翻訳の意図を検証していきたい。

1935年7月、増田は、呉組湘とのあいだで交わされた往復書簡四通（全文中国語）を、雑誌『斯文』に公表している<sup>43)</sup>この手紙の中に、増田が、自分の文学的な好みをかなり具体的に述べている部分がある。関係部分を翻訳して引用する。

徹底的なリアリテイの追求、これこそ、唯一の文学の道です。……ですから、リアリテイのある作品は、親しみと深い印象とを読者に与えることができます。逆に、上っ調子で絵空事のようなだと感じさせるならば、その作品は、芸術的機能の大部分、否、ほとんどすべてを失っていると思います。

……先生の作品には、ユーモアが非常に少ないように思われます。人生(そして文学……)において、ユーモアは、ほとんどの場合、オアシス、あるいは「副薬」としての働きをするように思います。(呉組湘宛第一信 下線引用者)

率直に申しますと、お国の文学は、批判性に欠けており(もしあったとし

ても、公式的できまりきったものです)、それが中国の作家たちに共通する弱点のように思えるものです……。もちろんお国の文学には優れた点もあります。積極的な行動性、行動の強調というのが、それです。しかしそれさえも、ほとんどの場合、文学的に消化されているとは言えません。批判性を欠き行動性のみが溢れているという弱点に加え、作家の手腕も未熟であるような文学は、日和見主義に陥いるでしょう。これではだめです。

……つまり、批判なきところに、いかなる発展・進歩はなく、仮にあったとしても、それは単に現実迎合したものか、盲動主義の一種でしかありません。したがって、文化的な仕事に就くものは、常に批判精神をもっていることが必要なのです。

あなたの文学が、徹底した批判的リアリズムの文学として、大成されるよう期待します。(呉組湘宛第二信 同)

下線部に示されているように増田は、“リアリティ”“ユーモア”“批判性”の三つを重視する。なかでもリアリティと批判性は、特に重要な要素だと認識されていた。リアリティの追求こそが「唯一の文学の道」であり、批判精神をもたない者は文学者たる資格に欠けるとまで、増田は言いきっている。増田の考える理想的な文学には、このふたつが不可欠の要素だったのである。呉組湘に対して、「批判的リアリズムの文学」の道で大成するよう求めるのは、そのためだ。

同時に、このような視点で見たとき、中国の現代文学がまことに不満足な状態にあると増田は指摘する。文学的に未消化な「(革命的) 行動の強調」がされるだけで、リアリティと批判性にと欠けていると見えたからである。こうした文学を増田は、「スローガンとモットーとの文学」<sup>44)</sup>と呼ぶが、それに対する批判はすこぶる手厳しい。「雑言」<sup>45)</sup> (1935年)では、

大雑把に云つて、今日の支那文學には性急な行動性の強調があつて、批判内省の深徹を缺いてゐる、……文學的に消化されていない行徑的號令が、恰もそれが義理でもあるかのやうに、オマケ的に、疔みたいに、小説の尻尾の

方にくつつけられてゐるのでは仕様がな。……あまりに性急な、浮ツ調子な起来文學には、ちょっと脚下照顧のブレーキを利かしてもらひ度くもなる。と、述べて、中国文学界の現状に対する厳しい批判を行っている。しかもこうした傾向は、抗戦期に入って一層強まったという認識を増田はもっていた。「華威先生」が掲載される直前の1938年11月、『文芸』に発表した「最近支那文學消息」<sup>46)</sup>では、

ある夜の會合の席上で、彼等の『抗戦文藝』を批判し、このごろの文藝作品が、機械論的な公式主義に陥り、いつもいきなりかゞやかしい希望的な勝利ばかりを描寫したり、それから民族革命のスローガンを尻尾にくつつけてゐたりして、その中に戦闘の過程をはっきり描寫することが非常に乏しく、瘦せこけてゐるということを指摘して、現實性に缺けてゐることが問題になった。

と、中国での議論を紹介する形で、自分の見方を示している。さらに「文藝の遊撃戦」<sup>47)</sup> (1939年)でも、中国の“抗戦文学”は「戦線の勇敢壮烈を興奮して取り上げ」ているが、「それらは空想と願望とを取りませた、文字面だけの立派さ、勇ましきをもつもので、肉づけのないもの」だと批判したうえで、「機械論的な公式主義に陥り、お義理のやうに民族革命のスローガンを尻尾にくつつけてゐるのみで、作品自体は瘦せこけた、現實性のないものが多い」という中国での批判を引用している。増田にとって“抗戦文学”は、批判性やリアリティを欠落させた、まさに文学の名に値しないものだと考えられていたのである。

しかし、中国文学のすべてがそうだと見ていたわけでもない。増田の眼にかなうような作品も確かに存在していた。「華威先生」こそがそうした作品であり、当時の中国には珍しい“批判的リアリズム”の傑作だ、というのが増田の評価なのだ。

抗戦々々といつてゐる昨今の支那には、それを自分が世間に名を成す手段として利用する徒輩が定めし多いだらうと思ふが、自己の賣名のためには手段を撰ばないといつた傾向を多分にもつ彼等の一面をこの小説で暴露したも

のであろう。この小説は相當に評判を得たらしいが、それはともなく、抗戦とか漢奸狩りとかいつて氣狂ひのやうになつてゐるかと思はれる中に、やはり文學者にはこれだけの反省と批判と、そしてそれを發表する餘裕のあることは、支那にも未だ文學は失はれてゐないことを知るに足るものだと思ふ。  
（「最近支那文學消息」<sup>48</sup>）

ここで増田は、“暴露”“批判”という面から、「華威先生」と作者とを積極的に評価している。つまり、作品が暴露したことは中国の現実の一面をついており、そういう意味でこの作品はリアリティを備えている、そしてそれを可能にしたのが作家の批判精神だというのである。これに、ユーモア小説という要素を加えれば、「華威先生」という作品が、増田の理想とする文学像と重なっていたことが分かる。したがって、その翻訳にあたって、中国への“侮蔑”や“諷刺”という目的が自覚的に存在していたとは認めがたいのである。

## 5. 〈後記〉の読み方

前章での検討を踏まえて読めば、〈後記〉のなかで増田が、「華威先生」を「内部的醜惡面を暴露した小説」とよび、それを「大膽に描寫した」作者について「眞面目な勇氣があるといつていゝであらう」と褒めるのも理解できる。増田の文学観と張天翼に対する好意的な評価は、〈後記〉のなかでも確認できるのだ。

と同時に、問題の“抗戦文学”に対する批判が、増田の文学観に基づくものだったことも分かる。つまり、「日支事變以來、支那の文學は所謂“抗戦文學”の一色で、彼等がいかに勇敢に抗戦したかといふやうなことを誇大に、威勢よく、出たらめに書くことばかりだつた」という非難は、リアリティと批判性とを重視する文学観から見たときに、増田が感じる不満の表明だったと言えるだろう。

しかも増田も紹介しているように、“抗戦文学”への批判は中国国内にも存在しており、日本人増田渉に固有の見方ではなかった。たとえば茅盾は、「八月の

感想——抗戦文芸一年の回顧」<sup>49)</sup> (1938年)という文章において、抗戦初期の大多数の作品が「英雄的で壮烈な」戦いを描くことだけに腐心しており、“抗戦文学”には「人を満足させるものはほとんどない」と批判している。〈後記〉は、中国でのこのような見方も踏まえて書かれていたと考えられる。

以上の事実から判断すれば、増田の批判をただちに中国への“中傷”に結びつけることはできない。

また、「敗戦支那における内部的醜悪」という表現についても、次のような事実が指摘できる。まず「内部的醜悪」という言葉は、矛盾の「八月の感想」から取ってきたもののようだ。具体的には、該文中の「抗戦の旗の下に隠れている大小の醜悪」「醜悪を剔抉する仕事を強化しなければならない」などの箇所がそれに該当するだろう。

一方、「敗戦支那」に似た表現は、当時の日本の雑誌から拾い出すことができる。たとえば尾崎秀実が1937年11月に発表した論文は、「敗北支那の進路」<sup>50)</sup>と題されていた。

しかも該文中での尾崎の議論は目を見張らせるものであった。このなかで尾崎はまず、上海戦線(1937年8月～11月)での勝利に日本人は酔いしれているが、戦争での多くの犠牲者のことや中国の国土の荒廃を思うと、自分の気持ちはむしろ沈んでしまうと述べる。次に、「支那」の抗戦は限界に達していると思われるものの、長期抗戦を続ける可能性もあり、その場合の戦術としては、毛沢東のいう「遊撃戦(ゲリラ戦法)」が取られるだろうと予想する。その上で尾崎は、アメリカの評論家の言葉「日本は実力以上に手を延ばし過ぎた。失敗するであらう」を引用し、間接的ながらも日中戦争において日本は敗北するという見通しを明らかにする。さらに、「支那に於ける統一は非資本主義的な発展の方向と結びつく可能性が特に増大しつつあるかに見受けられるのである」と論じ、中華人民共和国の成立までも予言してみせるのだ。

その後の展開はまさに尾崎の予測通りであったが、このような文章の題名に「敗北支那」という用語が見られる事実は注目すべきだろう。用語だけではその文章全体を評価できないということを、尾崎の「敗北支那の進路」は教えて

いる。

増田に尾崎ほどの認識があったとは言わないが、「敗戦支那」に類する言葉を使う文章にこうした内容のものがある以上、この表現をとってことさら中国への蔑視だと論じ立てることもできない。

このように見てくれば、この〈後記〉を、中国人民を悪どく攻撃したなどとする中国での批判には、同意しがたいのである。

## 6. 日中文学“非交流”の象徴——おわりに

以上のように、「華威先生」の“訪日”に対する中国の批判には、多くの疑問が提出できる。もちろん“友情と親愛”だけですべてを説明できるとは思わないが<sup>51)</sup>“侮蔑”“中傷”だという見方は一面的にすぎ、修正すべきだと私は考える。

しかしながらまた、「華威先生」翻訳前後の日中関係、たとえば文学的な関係を想起したとき、林林に代表されるような批判が当時の中国で起きるのは当然だったとも言える。日本人としての優越意識と中国蔑視の感情とをムキだしにしたような文章が、日本のジャーナリズムの紙（誌）面を飾っていたのは事実だからである。

たとえば、魯迅の印象を「梅の老木といつたやうな感じだ」と表現し、その魯迅に対して、「インドにおけるイギリス人のやうに、どこかの國を家政婦のやうに雇って國（＝中国）を治めてもらったら、一般民衆はもっと幸福かも知れない」などと語る野口米次郎の〈魯迅会見記〉<sup>52)</sup>（1935年）は、その典型的な例であろう。

しかも、この〈会見記〉に見られるような意識は、日中戦争の中で増幅・拡大され、それまで友好・交流の立場に立っていた（あるいはそう目されていた）人のなかにも、立場を転ずる文化人があらわれる（たとえば佐藤春夫の「アジアの子」<sup>53)</sup>の発表は、「事変」から八カ月後であった）。祖父江昭二のいうように、「他民族との連帯、中国民族との友好へと流れる“民族”（略）理念は、捨てら

れていく。と同時に、“進歩”への関心、抵抗的な契機をも多くの文学者たちは、みずからふみにじっていく<sup>54)</sup>状況が、日中戦争の勃発を境に見られわけである。

このような日本の状況について、断片的にせよある程度の情報は中国にも入っていたようだ。「アジアの子」の発表直後(1938年5月)に、郁達夫が、日本の文士は最低の娼婦よりも節操がないと書き、佐藤春夫の“変節”を厳しく批判している<sup>55)</sup>ことは、それを裏付けている。その結果、中国の文学者たちは、日本の文化人やジャーナリズムに対する不信や警戒の念を強めていったと思われる。

張天翼の「華威先生」が翻訳されたのは、まさにそういう時期であった。しかも「華威先生」は、いわゆる“抗戦文学”ではなく、逆に中国の“恥部”を暴いた作品であり、中国国内でも否定的な評価が存在していた。したがって、このような作品が日本の雑誌に翻訳されたと知ったとき、たとえば林林のように、翻訳の目的を中国に対する“侮蔑”と結びつけて考えたのは、当然の反応だったようにも思えるのだ。

だが実際の翻訳の経過は、林林たちが考えたものとはかなり違っていた。『文芸』編集部の「抵抗意識」、それを基底にした中国現代文学の紹介、さらに張天翼に対する増田渉の好意的評価など、「華威先生」の翻訳に内包されていた“友好”的な側面は、中国の文学者たちにまったく伝わらなかったのである。

こういう点から見るならば、「華威先生」の“訪日”は、両国文学者の断絶の時代、あるいは日中文学“非交流”の歴史を象徴する事件だったと言えるかもしれない。

## 註

- 1) 「華威先生」(茅盾主編『文芸陣地』創刊号1938. 4)
- 2) 丁易著『中国現代文学史略』(作家出版社1955. 7)

「華威先生」の“訪日”

- 3) 馮光廉・朱德發主編『中国現代当代文学二百題』(山東出版社 1984. 8)
- 4) 孫中田・張芬・蕭新如主編『中国現代文学史(下)』(遼寧出版社 1984. 8)
- 5) 1938年から40年にかけての二年間、「華威先生」の評価をめぐる論争が続いている。論争の経過については、趙遐秋・曾慶著『中国現代文学史(下)』(註16参照)に詳しい。
- 6) 作家・詩人。1933年に早稲田大学に留学後、「東京連連」に参加。帰国後の活動は、『救亡日報』編集者、「文協」桂林分会常務理事・組織組長など。『魯迅致増田渉著信選』(文物出版社 1975. 1)〈注釈〉の執筆者でもある。
- 7) 林林「談『華威先生』到日本」(救亡日報 1939. 2. 22)
- 8) 冷楓「槍斃了的華威先生」(救亡日報 1939. 2. 26)
- 9) 張天翼「関于『華威先生』赴日——作者的意見」(救亡日報 1939. 3. 15)
- 10) 『中国現代文学史略』(前掲2参照)
- 11) 田仲濟・孫昌熙主編『中国現代文学史』(山東人民出版社 1979. 8初・82. 6四)
- 12) 『中国現代文学史(下)』(前掲4参照)
- 13) 蕭新如・吳天霖主編『中国現代文学史』(東北師範大学出版社 1986. 6)
- 14) 黄修己著『中国現代文学發展史』(中国青年出版社 1988. 11初・89. 8再)
- 15) 「編集後記」では「華威先生」について触れていない。「按語」と書くべきである。
- 16) 趙遐秋・曾慶著『中国現代文学史(下)』(中国人民大学出版社 1985. 7)
- 17) 増田渉訳「華威先生」(文芸 6—12 1938. 12)
- 18) 増田渉「華威先生」〈後記〉(同前)
- 19) 「中國文學研究會略規」(中国文学月報 8 1935. 10)
- 20) 丸山昇「日本における魯迅」(伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本』汲古書院 1986. 10所収)
- 21) 竹内好「中國文學研究會」(文藝 8—4 1940. 4)
- 22) 1944(昭和19)年7月停刊。同年11月に河出書房より復刊。
- 23) 「解題『文藝』」(小田切進編『現代日本文芸総覧(下)』明治文献 1972. 4所収)
- 24) 同前
- 25) 高杉一郎「『文芸』の思い出」(関忠果・小林英三郎・松浦總三・大悟法進編著『雑誌「改造」の四十年』光和堂 1977. 5所収)
- 26) 高杉一郎「『文芸』編集者として」(文学 26 岩波書店 1958. 4)
- 27) 『文芸』に掲載された張天翼の作品は、「華威先生」のみである。
- 28) しかし、このような抵抗意識も、1941年12月の太平洋戦争開戦と同時に喪失したと高杉はいう。「日本が昭和十六年の暮についにあの絶望的な太平洋戦争のなかに飛び込んでいくと、私たちは一夜のうちに自己麻酔にでもかかったように、抵抗意識をすてて、一種の聖戦

意識にしがみついていた。それ以来、私たちは手を汚しつづけた」（『文芸』編集者として」前掲26）。

また、「解題『文藝』（前掲23）も、「昭和十七年新年号の『戦ひの意志——文化人宣言』（二十名）の特集をさかいに、誌面は急旋回して「決戦態勢」色を濃く」したと書き、太平洋戦争開戦を境に『文芸』は“変質”したという見方をしている。

- 29) 「編輯室」（文芸5—7 1937. 7）
- 30) 〈文藝通信〉「蕭軍より中野重治に」「中野重治より蕭軍へ」（文芸5—7 1937. 7）〈演劇通信〉「夏衍から久板栄二郎へ」「久板栄二郎から夏衍へ」（〃 5—9 1937. 9）
- 31) 『文芸』編集部「讀者諸氏へ」（文芸5—9 1937. 9）
- 32) 増田渉「魯迅のこと」（改造社『大陸』2—6 1940. 6）
- 33) 本文中で内容に触れられなかったものを以下に示す。◎周作人「東京を思ふ」（松枝茂夫訳 1937. 10）◎蕭紅「馬房の夜」（1937. 11）◎周作人「二つの禮讚」（松枝茂夫訳 〃）◎林語堂「わが郷土」（新居格訳 〃）◎蕭軍「同行者」（小田嶽夫訳 1937. 12）◎景宋（＝許広平）「医者」（1938. 3）
- 34) 増田渉「思い出すこと」（『雑誌「改造」の四十年』前掲25所収）
- 35) 「増田渉教授略歴（自記による）」（大阪市立大学文学部紀要人文研究19—10 1968. 3）
- 36) 佐藤春夫訳『世界ユーモア全集 第12巻支那篇』（改造社1933. 3）
- 37) 佐藤春夫「ユーモア全集支那篇のをはりに」（前掲書所収）
- 38) 『魯迅全集 第13巻〈書信〉』（人民文学出版社1981年）
- 39) 1932年6月28日付及び8月9日付書簡
- 40) 「張天翼からの増田渉宛書簡——汲古書院刊『魯迅・増田渉師弟問答集』〈解説〉補遺」（啞特刊1987. 3）に所収。
- 41) 増田渉「雜言」（中国文学月報1 1935 3,）
- 42) 武田泰淳「昭和十一年における中国文壇の展望」（支那1937. 1 引用は『黄河海に入りて流る——中国・中国人・中国文学』勁草書房1970. 8による）
- 43) 増田渉「我が日本式の手紙と支那小説家の手紙——幽默と諷刺」（斯文17—7 1935. 7）
- 44) 増田渉「支那文學史・現代」（中央公論社『世界文藝大辭典 第七巻 文學史』1936. 5 所収）
- 45) 「雜言」（前掲41参照）
- 46) 増田渉「最近支那文學消息」（文芸6—11 1938. 11）
- 47) 増田渉「文藝の遊撃戦——支那の抗戰文學に就いて」（東京帝國大學新聞1939. 5. 15）
- 48) 「最近支那文學消息」（前掲46参照）
- 49) 茅盾「八月的感想——抗戰文芸一年的回顧」（文芸陣地1—9 38. 8）

「華威先生」の“訪日”

50) 尾崎秀実「敗北支那の進路」(改造 19—13〈上海戦勝記念増大号〉1937. 11)

51) たとえば、「相手を見下したような感じ」がある、という〈後記〉の印象が完全に払拭できただけではない。

批判されても仕方のない弱点を抗戦文学が持っていたにせよ、「出たらめに書くことばかりだった」とまで書く必要があっただろうか。ここには“文学観”や“文体”とは別の問題もひそんでいるようにも思えるのだが、今はそれについて述べるだけの材料がない。〈後記〉については、なお検討すべき余地が残されているとだけ記しておく。

と同時に、増田の訳文について、全体として“逐語訳”という印象をもっているが、小稿ではまったく検討できなかった。その点での不十分さがあることも、あわせて記しておきたい。

52) 野口米次郎「渡印第一信 魯迅と語る——梅の老木といった感じ——上海より」(東京朝日新聞 1935. 11. 12)。この文章については、釜屋修「魯迅・モラエス・白鳥・野口——日中文学交流(一九三五)点描——」(『近代文学における中国と日本』前掲 20 所収)に詳しい。

53) 佐藤春夫「アジアの子」(日本評論 1938. 3)

54) 祖父江昭二「日本文学における一九三〇年代(上)」(文学 44 1976. 4)

55) 郁達夫「日本的娼婦与文士」(抗戦文芸 1—4 1938. 5)